

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

< 故佐久間鼎博士追悼録 > 佐久間鼎先生の思い出

著者	恩田 彰
著者別名	ONDA Akira
雑誌名	アジア・アフリカ文化研究所研究年報
巻	1969
ページ	74-77
発行年	1969
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00010270/

佐久間鼎先生の思い出

研究員 思 田 彰

私が佐久間先生との初めての出会い、今でもはっきり憶えている。ちょうど戦後東京大学で日本心理学会が開催された。ちょうど私が学生として研究発表会場の時間係をしていた時である。先生が午後の最後の発表をされていた。テーマは何んであったか忘れたが、神秘的体験の心理について発表されていたように思う。私は思わず話に引きつけられてじっと耳をすまして聞いていた。発表時間が切れたので、その合図をした。先生はやがておやめになると思った。しかし私はその話の続きを聞きたかった。時間はかなり過ぎてもまだやめられない。私はそのまま合図をせず、話の終るのを待った。というよりまだ話を聞きたかったのである。発表後、別の会場で総会が引続いてあることになっていく。その時、後の席で聞いておられた主任教授の千輪浩先生からメモがまわってきた。「これから総会が

あるから、やめていただくように」と書いてあった。

私はこの時から佐久間先生の学問に引きつけられていったように思う。先生が出された「神秘的体験の科学」（光の書房、昭和23年）は読んでみたが、当時大学で指導を受けた心理学とはかなり傾向のちがっていたものであった。

私が高等学校一年の時、故小保内虎夫先生から心理学を習った。そしてこの学問を一生やろうと覚悟を決めた。当時は、たしか「宗教心理学」を勉強して見たいと思っていた。大学を出てから「神秘的体験の科学」を読んでみたが、そこに禅の心理について語られていたが、よくわからなかった。それから東洋大学にくるようになって、しばしば先生とお話する機会があった。

その後昭和36年度、37年度の文部省科学研究費による総合研究「禅の医学的心理学的研究」が佐久間先生を班長として行なわれた。その時東洋大学に事務局がおかれ、私はその事務を担当することになった。そして先生の分担研究「創造活動と禅的体験における創造過程の心理学的研究」に参加した。その時までに禅については、学生時代可睡斎で禅僧の話を聞き、とくに「非思量、非思量と専念して思え」ということが耳の底に残っていたが、正式に坐禅はしたことはなかった。禅は不立文字といわれ、文献をいくら読んでもよくわからない。自分で坐って体験してみることだと思い、研究に御協力いただいた故橋本恵光老師指導の下に、そのお弟子さんたちといっしょに坐った。研究グループのお世話と参禅と研究と、全く私にとっては大変な仕事だったが、いい勉強になった。その頃すでに創造性の研究をやっていたので、その時に禅と創造性との関係について比較研究する機会を与えられたのであった。36年度に続いて37年度は臨済禅とくに悟りの問題について究明しようということになり、臨済系の御師家方に御協力をお願いした。その交渉のため先生といっしょに野火止の平林寺に白水敬山老師をおたずねした。また私一人で龍沢寺の中川宋淵老師と東大の三四郎池で、石の話をうかがったりした。しかしどなたも御都合がわるく御引受けいただけなかった。そこで公案を指導にとり入れている曹洞系の石黒法瀧老師の接心会の修行を研究対象として、夏休みに北多摩郡久留

米町の淨収院において合宿研究をした。このさい私も参禅し、貴重な体験をえた。それから禅について実参しながら研究を続けているのも、先生にその機会を与えていただき、御指導を賜ったおかげだと思う。

その後昭和40年9月4日、先生の喜寿祝賀会が行なわれたが、その事務を担当することになった。幸なことに多くの方々の御賛同と御支援をえて、盛大な会を催すことができた。この会の記念出版も、多少遅れたが「日本の表現の言語科学」として一九六七年五月に恒星社厚生閣から出版された。先生は新しい企画を持っておられたが、時間的に間に合わず、次の機会を待つことになった。その構想について、時々うかがったり、序論にあたるところを読ませていただいたが、専門外でよくわからないが、新鮮な独創的な構想であったように思う。それが完成されずに先生が世を去られたのは、誠に残念に思う。

先生が東洋大学を去られてから駒沢大学の大学院教授になられたことは聞いていた。そして44年度に文部省科学研究費による総合研究「禅の心理学的医学的研究」を佐久間先生を班長として、以前のメンバーに新しいメンバーを加えて、新しい研究計画の下に禅の科学的研究を再開することになった。駒沢大学でその研究会が時々開かれたが、先生のお姿はついに見かけることはできなかった。この研究に参加した大学は九大学で、私は東洋大学の研究分担者として研究に参加した。ちょうどその頃私が文学部長の仕事に追われ、先生から御指導を受けようと思いながら、その機会をえなかった。それが誠に残念でならない。

去る昭和45年1月9日午後4時55分先生はついに永眠された。その日の午前中福鎌先生から佐久間先生危篤の連絡があり、樺島病院にはせつめたが、その時すでにほとんど意識はうすれて、話すこともできなかった。そして安らかに大往生をとげられた。ほとんど苦しみを感じておられないように思えた。

先生は禅僧のごとく人生を淡々として渡られたように思う。一学究として自己の学問を構築しながら、無理なく社会的階梯を昇りつめ、教えようとせず人に教え、世話をしようとしてせずに人を世話し、自然に人から尊敬され、感謝さ

れ、表彰され、奉仕をうけられた。先生の御葬儀を終って、先生の門下生である駒沢大学の秋重義治先生は、「佐久間先生は運のよい方であった」といわれた。私もそう思った。別なことばでいうならば、佐久間先生は、それだけの御徳をつまっていたのだと思う。ここに先生の思い出を偲び、先生の御冥福を心からお祈りする次第である。